

◆平成22年度の新指定文化財◆

銅造水盤・ガラス乾板・漆芸

江東区教育委員会は、文化財保護審議会（会長・松平康夫：東京福祉大学教授）の答申を受け、区文化財として新たに3件を指定、3件を登録、1名を追加認定、2件を指定解除、1団体を認定解除しました。この結果、登録文化財の総数は1,055件、うち指定文化財は35件になりました。



銅造水盤全景



銅造水盤 正面左下の脚と刻銘



ガラス乾板紙焼き（乾板写真は2頁）



乾漆布目盛器

下町文化

NO. 253
2011.4.27

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL.(03)3647-9819
http://www.city.koto.lg.jp/

○新指定・登録文化財紹介

○江東区域の江戸藩邸
信濃国上田藩抱屋敷(1)

○江東区芭蕉記念館開館30周年特別展
芭蕉書簡三点
歴史の中の武将と文人
—中世から近世へ—
ちぎり絵「奥の細道」

○時雨忌講演会
『おくの細道』の
比較文学的考察(前編)

○新刊紹介
『江東区の文化財② 深川寺町界隈』
『東都三十三間堂旧記 三』

○平成22年度寄贈資料リスト

地域に根ざした文化財保護をめざして

江東区は、そのほとんどが江戸時代以降に開発された土地ですが、区内各所には、歴史的な遺産である文化財がたくさん残されています。

文化財は、区の歴史を伝えるとともに、地域に生きた多くの人々の証でもあります。その総数は、すでに1,000件を超えました。昨年度も、文化財6件があらたに指定・登録され、全部で1,055件となりました。

これらの文化財は、神社仏閣を中心に、道端・公園など、いたるところに残されているのです。皆様の身近にもきっとあると思います。普段、あまり気にしないものです。それらのなかには、百年あるいはそれ以前からその場所にあったものもありますので、少しでも気になってみてください。文化財は、未来に伝えることが大切です。

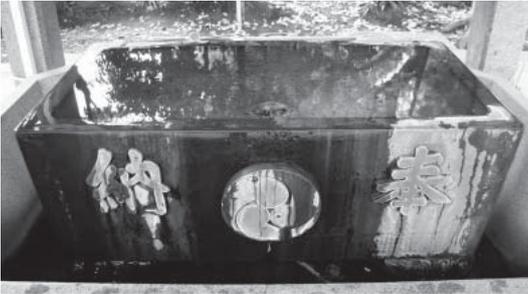
昨年度の指定・登録文化財については、2・3ページに詳しく紹介していますので、ご覧ください。

指定文化財

〔有形文化財（工芸品）〕

銅造水盤 太田正義作

富岡1―20―3 富岡八幡宮
享和3年（1803）5月に、神田に住む鋳物師太田正義によって作られた水盤です。一見すると全て青銅でできているように見えますが、石製の水盤を青銅板で包む構造になっています。しかし、繋ぎ目は表からは見えないうような巧みに仕上げられています。鋳造の脚には雲がデザインされ、優れた鋳物の技術が見取れます。



銅造水盤

水盤の正面と左右の側面には、計290名の奉納者名が刻まれています〔「出見世」「長家中」なども1名と計算〕。奉納者には、浅草寺門前や本所など、富岡八幡宮の氏子町ではない町の住人たちも多く含まれており、氏子町の範囲を超えた富岡八幡宮への信仰がみとれます。奉納者のほと

んどは商人とみられます。職種は釘鉄銅物問屋が多いものの、材木問屋・米問屋・御弓師など多岐にわたっており、商人たちの職種をまたいだ、富岡八幡宮への幅広い信仰の広がりがうかがえます。

水盤全体には火をかぶった跡がみられ、水盤の背面には複数のヒビがありますが、はめ金で丁寧に補修されています。

本水盤は、震災や戦災、戦時中の金属供出をも乗り越え、破損部分を補修されて、現在でも富岡八幡宮の水屋で水盤として利用されています。これだけ大型で、多くの奉納者名が刻まれた本水盤は、江戸の鋳物師の技術を伝える工芸品であるとともに、富岡八幡宮への信仰のありようや、江戸の商人たちの活動も知ることのできる貴重な文化財といえます。

〔有形文化財（歴史資料）〕

ガラス乾板 深川区史図版 113点

東陽4―11―28 江東区

ガラス乾板とは、感光乳剤をガラス板に塗布した写真材料です。本ガラス乾板は、大正15年（1926）刊行の『深川区史』上・下巻（深川区史編纂会）に掲載するために、絵図・地図・錦絵・風景などを撮影した、現像処理済み銀・ゼラチン黑白画像乾板です。



ガラス乾板

寸法は、縦16・5cm×横12・0cmが主で、厚さは0.1～0.2cmです。113点のうち、『深川区史』に掲載された写真は、上下巻合わせて82点です。『深川区史』の写真図版は、上巻で100点、下巻で133点ですので、すべてのガラス乾板が現存しているわけではありません。

一方、31点が未使用で、その中には、失われた風景を撮った写真もあります（右写真。大和町（冬木）と鶴歩町（木場3）とに架かる大和橋とみられます）。『深川区史』の編纂は大正11年に開始され、翌年6月には、編纂事業を広く紹介する目的で、史料展覧会が明治小学校で催されています。ところが9月1日に起こった関東大震災により、集めた資料や稿本を焼失してし

まいました。しかし、11月には編纂事業の継続を決め、震災後1年間は資料の再収集に努めました。同14年9月に上下巻の編纂を終了し、翌年の発刊に至りました。よって、本ガラス乾板の撮影年代は、編纂期間中の大正11年から15年の間と考えられます。15区時代に編纂された他旧区史の編纂資料は戦災により失われていることから、本ガラス乾板は、『深川区史』編纂資料としてのみならず、15区時代の旧区史編纂資料としても貴重なものです。また、深川地域の大正期の風景や現存しない石造物の画像を含むことなどから史料の価値も高く、地域史料として重要なものといえます。

〔無形文化財（工芸技術）〕

漆芸

保持者 前田仁

漆は、縄文時代の出土品にも見られ、古くから日用品に使用されていたことがわかります。また、器・建築・仏像などにも施された漆塗り技術は、のちに発展した加飾技術（螺鈿・蒔絵など）と一体化し、華やかな工芸作品を生みだしました。江戸時代には、全国各地に独特の漆芸技法が現れ、さまざまな場面で生活を支えてきました。

今回指定された漆芸技術の保持者前田仁氏は、昭和10年生まれで、16歳で父・千代松氏に弟子入りし、漆塗り技

登録文化財

【有形文化財（建造物）】

石造鳥居 昭和5年在銘

永代2-37 福住稲荷神社

神明形で、花崗岩で造られています。柱に「昭和五年二月吉日建之」「澁澤倉庫株式会社」の刻銘があります。澁澤倉庫株式會社は、澁澤栄一が創業した澁澤倉庫部が前身です。栄一は、明治9年（1876）に深川福住町（永代2）にあった近江屋喜左衛門（4代目荻江露友）の屋敷を買い取り、同30年に澁澤倉庫部を創業しました。近江屋の邸内祠であった福住稲荷は、引き継がれて、同社の守護神として敷地内に祀られました。関東大震災で焼失しましたが、富岡八幡宮に預けた神体は無事でした。昭和5年（1930）に社殿を復興し、2月13日に神体の遷座式を執り行いました。鳥居は、復興時に奉納されたものです。



福住稲荷石造鳥居

【史跡】

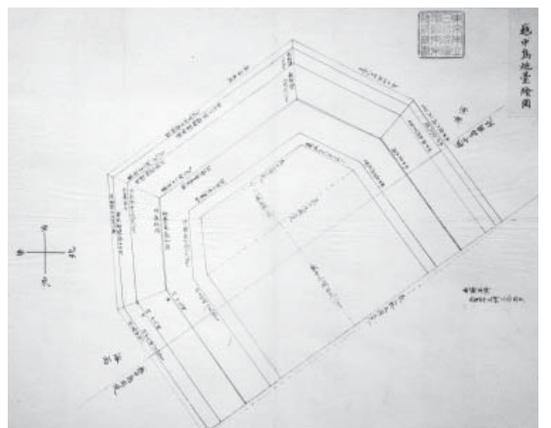
越中島砲台跡

越中島2-1

国立大学法人東京海洋大学

嘉永6年（1853）のペリー来航以降、江戸幕府は江戸内湾への台場建設に着手し、沿岸にも砲台建設を始めました。

越中島砲台は、これまでは計画だけであったと考えられてきましたが、調査の結果、元治2年（1865）2月までに完成していたことがわかりました。砲台は越中島の幕府訓練場から沖合に突き出して作られ、佃島砲台とともに隅田川河口部の守りを固めましたが、幸い、外国船と砲弾を交えることなく明治維新を迎えました。その後、越中島訓練場の一部として砲台跡は残っていましたが、明治35年（1902）に商船学校（現東京海洋大学）が越中島に移転した折に、校地整備により埋め立てられたとみられます。



越中島砲台絵図（東京都立中央図書館特別文庫所蔵）

【無形文化財（工芸技術）】

指定解除

縫紋

保持者 天野一政

木挽

保持者 林 以一

登録解除

庖丁製作

保持団体 吉實庖丁店

登録

庖丁製作

保持者 吉澤 操

追加認定 吉澤 清

卓越技能章受章

木工（建具）

友國 三郎氏

区登録無形文化財（工芸技術）保持者の友國三郎氏（三好2）は、昨年11月に国の卓越技能章を受章されました。

友國氏は、昭和40年に建具製作の修業に入り、昭和62年に現在地で友國建具店を創立しました。以来、45年もの長きにわたり、仕事に従事されています。

今後とも、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。



前田 仁 氏

術を習得し、現在にいたるまで、60年もの長きにわたって漆塗りに従事してきました。

事してきました。

昭和62年頃からは、従来の木地だけでなく、「乾漆素地」の作品も手がけ始めました。乾漆は、もともと仏像製作の技法として伝来したもので、次第に工芸にも用いられるようになり、明治以降は、石膏で作品の型を作り、その上に和紙や布を漆糊で貼り重ね、石膏から取り外した素地の上に、漆塗りを施す技術に発展しました。仁氏は、その技術を独学で学び、長年培ってきた漆塗りに技術を乾漆素地の上に施してきました。乾漆作品は、主に展示会に出品され、「伝統工芸新作展」（日本工芸会東日本支部主催）や「伝統工芸漆芸展」への入選など、受賞を重ねています。

昭和59年3月には、江東区登録無形文化財（工芸技術）保持者として認定され、平成14年には東京都優秀技能者として表彰されました。

信濃国上田藩抱屋敷(1)

江戸時代の江東区には、深川や小名木川沿いなどに数多くの武家屋敷がありました。本コーナーでは、そうした武家屋敷跡をたどりたいと思います。

第1回目は、海辺新田村にあった信濃国上田藩(5万3千石)の抱屋敷(白河4丁目・三好4丁目付近)を取り上げたいと思います。

大名の江戸屋敷は、幕府から与えられた拝領屋敷(上屋敷・中屋敷・下屋敷など)と、百姓や町人から土地を買って手に入れた屋敷の2種類に大きく分けられます。後者のうち、百姓から買った屋敷を抱屋敷、町人から買った屋敷を町並屋敷といいます。

したがって、海辺新田村の上田藩抱



小名木川越しに見た
プラザ元加賀のA B棟・C D棟

屋敷は、海辺新田村の百姓から上田藩が買った屋敷ということになります。

図1は、文政11年(1828)にこの抱屋敷を描いた「江戸深川松平伊賀守抱屋敷絵図」(上田市立博物館所蔵)です。

絵図には、屋敷の面積が17551坪で、建坪の合計が751坪余と書かれています。そのうち、屋敷のうち、建物の建っていない部分が95%以上であったことになりま

す。これをトレースして文字を活字に起こしたものが下の図2です。これを見ますと、小名木川に面した屋敷の北側に、道に沿って長屋・土蔵・長屋門が並んでいたことがわかります。場所は、現在のプラザ元加賀のA B棟・C D棟のあたりです。長屋門を入れると、さらに長屋が3棟あります

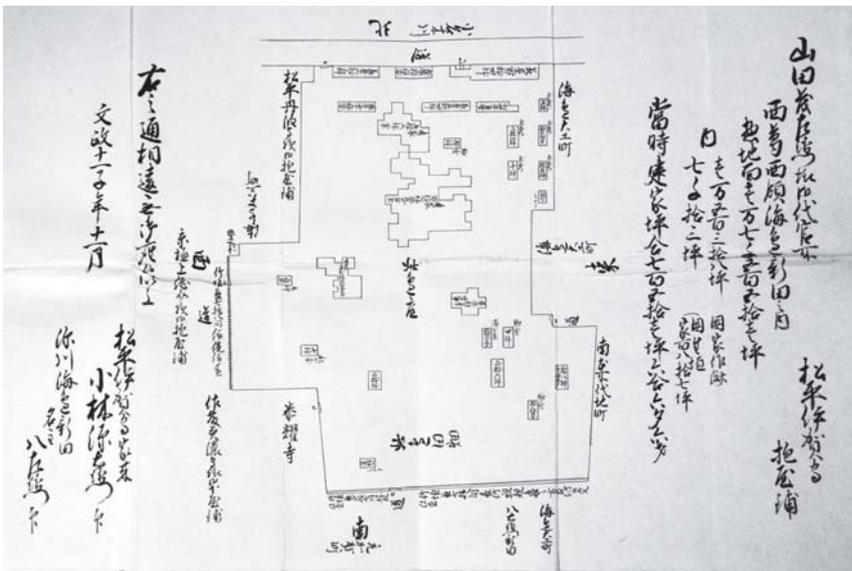


図1 文政11年(1828)「江戸深川松平伊賀守抱屋敷絵図」(上田市立博物館所蔵)

す。これらの長屋は、江戸詰めの上田藩士の宿舎だったとみられます。長屋の奥には「建家」が2棟あります。屋敷の東側には、5棟の土蔵が建ち並んでいます。

しかし、屋敷の中央に進んでいくと、「此辺庭」とあります。藩主の憩いの場所だったのでしょう。近くに「船小

屋」とあるのは、庭の池に浮かべる船を入れておいたのでしょうか。周りには「湯小屋」もあります。さらに進むと、「此辺田畑」と書かれています。大名屋敷の中に、なんと田畑があったのです。一体誰が耕していたのでしょうか? (次号につづく)

(文化財専門員 中西 崇)



図2 「江戸深川松平伊賀守抱屋敷絵図」のトレース図

右之通相違無御座候、以上
文政十二年十二月
松平伊賀守家来
小林源右衛門 印
深川海辺新田
名主
八左衛門 印

4月28日(木)～6月26日(日)まで

芭蕉書簡三点

歴史の中の武将と文人

—中世から近世へ—

ちぎり絵「奥の細道」

芭蕉記念館は、昭和56年(1981)4月の開館から今年で30周年を迎えました。これを記念して、現在3つのテーマからなる特別展を開催しています。

芭蕉の真蹟は『芭蕉全図譜』(岩波書店・1993年)によると、452点が紹介されています。その内訳は、作品が310点、書簡が142点です。それ以降も新出の真蹟が発見、紹介されるなど、現在500点ほどとみられています。このうち元禄4年(1691)

た。さらに同3年正月17日付の杜国宛の芭蕉書簡は従来から知られてきた写とは別の写で、数箇所異なるが認められ、こちらがより真蹟の内容に近いのではないかといいものです。芭蕉の生涯は、こうした資料の出現によって、より緻密なものとなっていくことになります。

二つめは、「歴史の中の武将と文人—中世から近世へ—」の展示です。

足利尊氏の室町幕府の開府から、やがて応仁の乱が起こり、次第に諸国は戦乱の嵐が吹き荒れました。諸国には、武田・上杉などの戦国大名が割拠しました。この動乱期にあって、歴史の舞台上に登場したのが織田信長です。そして信長の死後、豊臣秀吉が天下統一を果たすことで、ようやく時代は中世から近世を迎えることとなります。展示では、歴史の渦中にあった室町將軍家の和歌の短冊や懐紙、正親町天皇の和歌懐紙、「天下布武」印を押した

しても知られた今川了俊の書幅、茶人千利休書状など、初公開となる武将や文人の資料を中心に26点、32名の歴史上の人物を集めています。

三つめの展示が「ちぎり絵『奥の細道』」です。

ちぎり絵とは、「和紙をちぎって台紙(色紙)に貼り、描く絵」のことをいいます。その魅力は、「専門的な知識や技術のない人でも、下絵の通りに貼るだけで簡単に美しい作品ができる面白さ」があるとされています。今回

芭蕉記念館

開館時間
午前9時30分～午後5時
(4時30分までにお入りください)

展示室休室
第2・4月曜日(祝日の場合は翌日)

入館料
大人100円 小中学生50円

交通
都営地下鉄新宿線 大江戸線 森下駅 徒歩7分

問合せ
江東区芭蕉記念館
江東区常盤1-6-3
☎03(3663)1448

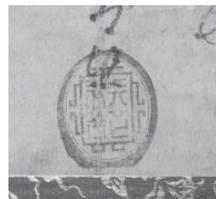


今川了俊筆「源氏物語」注釈書

さらに文人と杉謙信・武田勝頼・柴田勝家・伊達政宗などの書状、



織田信長黒印状(上)と「天下布武」印

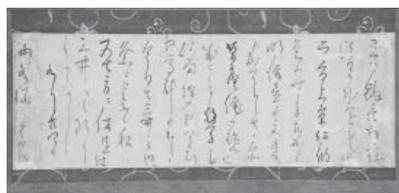


ちぎり絵「奥の細道」(西村憲峯作)

から30周年を記念して芭蕉の「奥の細道」の「名句22句に、協会の総力を挙げて挑戦し、およそ一年をかけて完成」した額装仕立てにした作品の数々を展示しています。

この機会に3つのテーマから成る興味深い展示の数々に触れてみては如何でしょうか。あなたは、どの作品に心を動かされましたか。(横浜文学)

の企画は、日本ちぎり絵文化協会の全面的な協力によるもので、同協会が平成22年に創設



曲翠宛芭蕉書簡(寄託資料)

9月9日付の去来宛の芭蕉書簡は、平成20年に幻の書簡として紹介されたのであり、同年9月24日付の曲翠宛は平成16年に朝日新聞で真蹟として紹介されまし

俳人・比較文学者 マブソン青眼

私は十歳の頃、ボードレールの長編詩『旅への誘い』を読み詩人になろうと決めた覚えがあります。そして詩人ではなく俳人になろうという志は、交換留学先の宇都宮高校の図書館で松尾芭蕉の英訳を読んだ時に生まれました。どこの国の高校へ行くかと考えていたら、母に「英語圏ではなく世界の果てまで行ってこい」と言われて、

過。「和漢混交」と「雅俗混交」が、「時間」の表現と「空間」の表現の交錯によって描かれています。これは講演の後半に話しますが、ここが芭蕉の一番深い部分であり、私はすぐには「古池や」の句が理解できなかったのです。「古池や」の句は「時間意識」と「空間意識」が芭蕉らしさであると言えます。

日本の高校に来たのです。そしてパリ大学日本文学科に入ると、農家で人情のある俳人の小林一茶に興味を傾きましたが、俳句を理解するためには芭蕉も研究しなければと、次は早稲田大学の堀切実先生の下で研究しました。この一茶研究者、俳人としての原点は、高校生で出会った「古池や蛙飛び込む水の音」の英訳でした。これが日本文学を代表する傑作と知り、詩人になろうと思っていた私は「日本人はどうやって五・七・五だけで文学の傑作をつくるのだ」と大変ショックでした。

芭蕉の作品と西洋近代文学との共通点は、積極的な「想像力」と「空想、夢」の表現があること、「夢」の俳人芭蕉は、西洋のロマン派であるということでしょう。一方、芭蕉の作品の特徴であり、西洋文学には見られない、西洋文学との相違点は何か？それは時間意識、空間意識だと思います。時間意識と空間意識が「周期的」であるということ。また「周期的な時間意識」を表現するために「時間」と「空間」を差し換えることもあるのです。

芭蕉の「古池や」の句には、とても大事な部分が含まれていると思います。「古池」はとても珍しい漢語、「蛙飛び込む」は和語。「古池」という時間の経過と歴史、「蛙飛び込む」の空間の経

『おくのほそ道』は、芭蕉らしさを最もよく表現しています。その芭蕉らしさを「不易流行」と呼ぶ人もいますが、私は、西洋文化には無い「時間と空間の交錯とその周期的な時間意識」と呼んでいます。『おくのほそ道』自筆本の発見から十五年ほど経ち

ますが、書誌学的な研究よりも、どういう作品なのか、芭蕉が文学史や世界の文学の中でどういう位置なのか、というような文学性の研究が必要になってきたと思われれます。ヨーロッパでは草稿が現存しているものでも、文学性の研究が盛んに行われています。これは、1960年代以降の構造主義的文体論(grammatique)による、「この作品の特徴は何なのか」という問いを基とした研究方法なのです。文体論の研究で実証的な方法論に、「文献学的円環法」(circle philologique)というものがあります。まず主観的な読み方で作品を読み、一読者として一番印象に残る象徴的な部分を探します。その象徴的な一節の組織的原理を分析して、客観的に、全体の組織的原理と同じ原理が現れているかどうかを調べます。途中で全体に当てはまらないことがわかれば、再び別の部分から別の原理を探し、その原理が「細部にまで滲透し、細部が中心にむかって結びつき合っている」かどうかを調べます。細部の全てに同じ原理があり、その中心に向かって作品中の一番のクライマックスがあれば、そこには特に強くこの原理の特徴が見え、この原理が作品全体に広まっていく構図がわかります。

なぜ一行読むだけでこれが『おくの

ほそ道』であると思えるのか、それとも思えないかが重要な点です。もしそう思える一節が見つかったらそれがこの作品の一貫性であり、そこに作品の美学の深さがあるということになります。そこで、私なりに『おくのほそ道』が最も表現している中心的なものについて探してみました。まず「月日は百代の過客にして」「行かふ年も又旅人なり」「舟の上に生涯をうかべ」「馬の口とらえて」などのフレーズが母音のウ段で始まり、日本語で非常に大事な様子とも言える頭韻を踏み、非常に響きが良く感じられます。冒頭だけでも一つの原理が現れているようです。で、この文献学的円環法を試みました。「月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人なり」の特徴は、「月日」を「過客」(「旅人」)に喩え、「年」を「旅人」に喩える、同じ比喩表現を二回繰り返す強い表現です。周期的な天体の動きと時間の単位というものを、歩く旅人に喩え、時間の表現と空間の表現を交錯させて、周期的な時間を示しているのです。この時間の表現を空間的な表現に見立てることが、細部の隅々までも見られるか、というところで、いくつか気になったところがあります。

例えば『おくのほそ道』は「行春や鳥啼き魚の目は泪」の句で旅立ちが始

まり、最後は「蛤のふたみにわかれ行秋ぞ」で、その両方が照応しつつ「季節」という「時間」、そして「行」という「空間」的な表現を同時に表現しています。また、時制の使い方が非常に独創的で、不適切と言っても良いぐらいの過去形と現在形の交錯が見られます。これは芭蕉がしっかりと考えて表現している気がします。

草加の章段の最初の部分で「今年元禄二とせにや」とあり「にや」は現在形、その後「その日」と続きますが、普通は「この日」となるでしょう。さらに「漸早加と云宿にたどり着にけり」と完全に過去形の「着にけり」となっています。旅が進むにつれて現在形と思わせる表現が、過去形と思わせる表現に変わります。もう一つ同じような例として、那須の章段「頓て人里に至れば、あたひを鞍つほに結付けて馬を返しぬ」で、近未来の「頓て」に過去形の「返しぬ」を付けて、やっと宿にたどり着いたその距離を強く感じさせるためかのような、過去形を使っています。レトリックや修辭学的な用法かもしれませんが、芭蕉が空間を歩くことによって歴史を遡るという大事な原理を暗示しています。文体でこういうレトリックを使うのはさすがです。決して正しい時制の使い方ではありません

し、俳文・狂文においても、場所によって時制が勝手に変わるといふ例はあまりないのです。そこで、先ほどの「時間と空間の交錯」が同時に「周期的な時間意識」に基づいているという話をしたいと思います。

「月日は百代の過客にして行かふ年もまた旅人なり」は、「moon and sun」を表現すると同時に「month and day」を表現しています。この二つは、日本人にとって当たり前でありながら、全く違う意味です。それでは、もし「day and month」が「sun and moon」と同じように周期なものだったらどうでしょうか。この単語が、時間は一直線なものではなく、周期的なものであるという考え方を教えてくれているのです。私は日本とは違う文化で育ったので、この「日」と「月」が二つの意味を持つということが不思議に思えました。そこで「周期的な時間意識」を持つて生きているのではないか、と思ったわけです。このような意識はヨーロッパには見られませんが、実は、初期イスラムのある作品には「周期的な時間意識」をもとに、周期的に同じ所に戻るといふ旅の物語がよく見られます。主に十一世紀の、現在のイラクのバグダッド辺りで編集された『アラビアンナイト』は、千一回月が現れ、月が現

れている間シャハラザードという女性が王様に向かって語りを始めて、また曙が染めてきたのに気づき語りを止めて、また次の夜に語りを続けるという約三年の話です。その中で最も代表的な話の一つ「ヌール・ディーンとシャムス・ディーンの物語」に『おくのほそ道』との時間意識の類似性を強く感じます。これは、イスラム文明が最も華やかで開放的だった八世紀末のカイロの、ヌールとシャムスという仲の良い美男子兄弟の物語です。二人は頭もよく若くしてスルタン（大王）から大臣に任命されますが、ちよつとした勘違いで兄弟は初めて喧嘩します。その晩、旅好きの弟ヌールは名声と地位を捨て、愛馬の口をとらえ、詩を朗誦しつつエジプトの東北を目指して旅に出

ます。「旅にゆけ、別れし者に代わる者を君は見つけん、されば故郷をあとにして、遠く異国を求めゆけよ。げにわれは見ぬ、よどみたる水は腐るを、流るればそは清けれど。また、満月に欠けゆくことのなくならば、満月の頃がきても、その麗しき姿をば眺めんとするもあるまじ……」。芭蕉的であると思いませんか。旅の素晴らしさを月の周期に喩え、自分の故郷を捨てて他との出会いを求めようという積極的な生き方、「淀みの水は腐るのだから流

れた方が美しい」との捉え方。これらは、時間の経過、つまり旅人の時間を月の満ち欠けに喩えていることが、ここに芭蕉的です。

私は二十歳の時パリで初めてこのアラブの詩を読み、真つ先に『おくのほそ道』の冒頭を思い出しました。「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす」。両方の詩人は、旅の素晴らしさを礼賛するにあたって、その「旅」の時間を「月」と「日」の周期に喩えているという点が印象的です。ヨーロッパのロマン派紀行文の多くは古代の旧跡などへ行く旅の過程を描き、旧跡での経験をクライマックスとして終わる、その時間の経過は一直線的なものです。『おくのほそ道』と『アラビアンナイト』のこの話とは、必ず何か同じところに戻るといふ「周期的な時空意識」を常に暗示しています。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の聖地旧跡を前にして歴史の栄枯盛衰を振り返り、それと同時に旅する自己の哀れを感じ涙を流します。「自分の哀れ」と「歴史の哀れ」を重ね、歴史の長さの中の自分のちっぽけな姿を見て泣くのです。（次号につづく）

新刊紹介

『江東区の文化財② 深川寺町境界』

『江東区の文化財』シリーズの6冊目は、「深川寺町境界」として白河・三好に所在する文化財を収録しました。この地域には、靈巖寺や雲光院、浄心寺などの子院や塔頭といった経歴を持つ寺院が多く、寺町の様相を醸し出しています。

『江東区の文化財』シリーズは全8冊の予定で、これまでの既刊と収録地域は次の通りです。

③ 永代橋境界

【佐賀・永代・福住・深川・越中島】

④ 門前仲町境界

【門前仲町・富岡・牡丹・古石場】

⑤ 木場

【平野・冬木・木場・東陽】

⑥ 亀戸Ⅰ

【亀戸1〜3丁目】

⑧ 砂町

【北砂・東砂・南砂・新砂】

【規格】 A4判 【価格】 500円

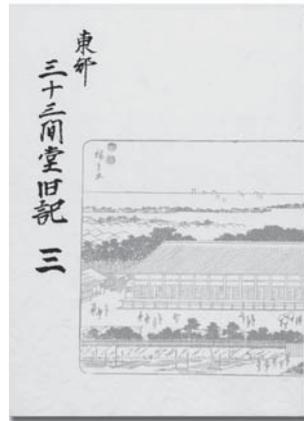


『東都三十三間堂日記 三』

平成18年度に区指定文化財（古文書）

となった東都三十三間堂日記（深川2正覚寺所蔵）の第3巻を刊行しました。この史料は深川三十三間堂の堂守である鹿塩家の当主が書きつづった古記録です。今回は、延享2年（1745）から安永9年（1780）までの間に関する記事がまとめられています。

本文上段に原本の写真を載せ、下段の釈文と対応できるようになっていますので、古文書の勉強にも活用できるものとなっています。



※頒布場所

文化観光課文化財係

（区役所4階 32番）

こうとう情報ステーション

（区役所2階）

芭蕉記念館（常盤1-6-3）

深川江戸資料館

（白河1-3-28）

中川船番所資料館

（大島9-1-15）

平成22年度寄贈資料リスト

22年度、文化財係に寄贈された資料は次の通りです（敬称略）。

寄贈資料 寄贈者名（住所）

・炭火アイロン 松本孝子（常盤）

・旧日本軍のパラシュートの材料など 豊田勇（新大橋）

・砂町尋常高等小学校卒業記念写真 齋藤美江子（北砂）

・木場の古写真ネガフィルム 加瀬重雄（南砂）

・「東京府江戸川上水町村組合事業経過概要」・「亀戸駅を中心とする交通調査報告書」（昭和14年）・「開港記念東京港誌」（昭和17年） 鈴木康治（亀戸）

・木場の古写真55点 遠山泰彦（横浜市）

・徽章「深川区防護団平久分団記念」 鈴木テル子（金沢市）

・砂村尋常小学校修業証書・表彰状・感謝状など8点 吉野義道（東砂）

・押絵羽子板28点 大木誠（大島）

・深川政府倉庫関係資料一括 東京農政事務所（千代田区）

・書籍一括 山本妙子（毛利）

・砂町銀座音頭ソノシート

砂町銀座商店街振興組合（北砂）

・古写真2点 山本善弘（墨田区）

・城東公益質屋建築透視図 中野俊章（亀戸）

・古写真・新聞スクラップ・書籍など56点 中谷実（町田市）

・深川小学校卒業アルバム・深川第一中学校卒業アルバム・関東商工高等学校卒業アルバム 鈴木行雄（調布市）

・深川区詳細図 国分正幸（森下）

・鬼瓦3点 村林妙子（渋谷区）

・『広重と浮世絵風景画』 長倉眞生（白河）



押絵羽子板



炭火アイロン

ご協力ありがとうございました。

お詫言正

前号（252号）の「釜屋堀庚申堂のおまつり」のうち、本文上段10〜11行目の西暦に誤りがありました。正しくは、昭和7年（1932）となります。

お詫びして、訂正いたします。